

精神発達遅滞幼児の言語習得過程

その3. コミュニケーション行動の変容と大人のかかわり方について.

磯部 久子

(四国女子大学短期大学部)

I 研究目的

顕著な言語発達の遅れを示す精神発達遅滞幼児は、人とのコミュニケーション意欲が弱く、またその技術も貧弱である。そのため一方の担い手である大人のかかわり方がコミュニケーションの効率に大きな影響を与えることは、すでに前回の発露で明らかにした。

ところで、一人の幼児とのかかわりを重ねる過程においても、かかわりにくさの顕著な時期があることに気はいた。すなわち、人見知りや屈折した要求表現の出現である。そこで、その実態を明らかにし、発達遅滞幼児のコミュニケーション行動を促進するためのかかわり方の手がかりを得ることを目的とした。

II 研究方法

- (1) 徳島県A通園施設に通園する幼児で筆者がかかわりにくさを感じた3名を選び、対人関係と言語を中心にビデオテープの再生による分析をする。
- (2) 担任保育士からの日常生活の情報を参考にする。
- (3) (1)のビデオテープは、筆者が担当する個別指導場面の全体を録画したものであり、その場には、幼児と母親と担任保育士が参加している。
- (4) 対象児

＜B児＞ 3歳9か月、女児、痙攣性症状群、定頭8か月、初語3歳、ほふく移動、四世代家族の独り子、曾祖母が濃密な育児をしている。

＜K児＞ 3歳2か月、女児、ダウン症、定頭6か月、初語3歳、ほふく移動、父母兄の家族で、母は干渉型。

＜T児＞ 3歳11か月、男児、父母兄、母は冷静型、軽度CPを疑われた精神発達遅滞、定頭5か月、初語3歳、歩行2歳5か月

以上3児とも歩行促進の訓練をうけたり、継続中である。

III 結果

対象児3名のコミュニケーション行動は、表1、2、3に示すとおりである。

B児は、かかわりの初期に、顕著な人見知りと新しい場面に対する不安を示しコミュニケーションの成立までに時間を要した。

B児、K児は友だちとの関係が育つ過程で乱暴な行動がみられる。

T児は友達関係に無関心な状態が長く続き、大人との関係に素直になつた頃から、友達を慰めるような仕草でコミュニケーションを図ることがみられた。

K児やT児は、大人を意識して屈折した行動がかなり長期間続いた。特にT児は初期の適応の良さに比して中期は異常なコミュニケーション行動が目立った。しかし、ことばの発出は確実に量的に増えた。

IV 考察

三事例の変容の様態と大人のかかわり行動との関連で考察すると次のように要約できる。

幼児が社会性を発達させていく過程と考えられる人見知りや反社会的な拒否的行動が3歳〜5歳にかけて顕著に表われている。それが大人のかかわりにくさの感じとなっていると思われる。しかし、三例ともその問題は3年間の間にかなり改善されている。その過程における大人のかかわり行動の要点はビデオ再生による検討の結果次のようにまとめることができる。

(1) 幼児の行動や状況に大人が同調することが幼児-大人のコミュニケーションを成立させる基盤である。質問-応答関係では、幼児からの視線や指さしをとらえて大人が答えることから、大人の働きかけや質問に幼児が応答する関係が育っている。すなわち、指示-遂行関係では、手本の呈示を急ぎすぎると幼児の遂行拒否を招いている。たとえば、遊具操作においても、幼児の自発的扱いに同調する必要があるコミュニケーション関係を成立させている。

(2) 幼児は一度学んだ遊び行動のパターンにとらわれる傾向が強い。しかしそれは遊ぶために必要な時間でもある。一見遊びが停滞しているように見える時に性急に転換させようとして、幼児の攻撃的行動を誘発していることが多くみられた。

(3) 幼児が大人の発語を受け手と渡(手)という役割規則に従って理解できないためのコミュニケーションの混乱が多く、言語的コミュニケーションと共に、活動レベルのコミュニケーション学習が十分とえらる必要を痛感させられた。これは確かな意味の伴う発語の発達の前提としても重要なことである。T児はコミュニケーション行動としてはいろいろな問題がありながら発語量は増しているが、事象や状況とちぐはぐなとびが多い。

(表2) K児の工ミエケミエン行動とこれとは

(表3) T児のコミニケーション行動とことば

NII-Electronic Library Service